

若月 仁 事務所

〒949-1730-02

南魚沼市浦佐 九二二の二

レインポールビル

TEL.025(780)4011
FAX.025(780)4012

被災地からの報告

岩手県立高田高等学校

第1部は、岩手県陸前高田市にある県立高田高校より、被災地からの報告があった。高田高校は津波により甚大な被害を受け、生徒18名教員1名が死亡・行方不明となった。校舎も大きな被害を受け、現在も大船渡東高校での授業を余儀なくされている。

同校教員からは、スクールバス時刻が中心の活動制約、教室や部活動場所の不足、生徒の活動にかかる保護者の負担増などの現状が語られ、加えて生徒の抱えるストレスについても切実な報告があった。

大きな被害を受けた同校であるが、生徒一人一人の状況は同一ではない。ある生徒は津波で自宅や家族を失った。一方で被災はしたが家も家族も残った生徒もいる。直接の被害が小さかった生徒は「自分には多くが残り、すまない」と思う。多くを失った生徒はその気遣いに心がささくれ立つと話す。どちらも深いストレスを抱えている。や

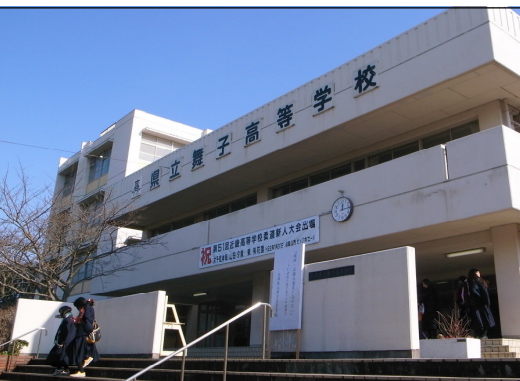
PHOTO:Mitsukuni Sato



り場のないストレスにどう向き合っていけばいいのか悩む教員がいる。その教員もまた、被災者である。被災地の現実に聞き入った。

新潟県中越地震の際、被災地の学校に勤める教員からの相談を思い出した。担任する児童は皆大きな被害を受けた。自分は遠く離れた自宅で直接の被害はなかった(あの日は土曜日)。余震に怯える子どもたちを前に、その不安にどう寄り添えばいいかわからない。被災地元で生活する職員との距離が縮まらない。被害がなかった自分の身の置き場が探せない。

■阪神・淡路大震災を忘れない
2012年1月、阪神・淡路は震災から17回目の1・17を迎えた。
県議会議員になって毎年、この時期に兵庫を訪問している。視察の中心は県立舞子高校での「震災メモリアル行事」出席である。この他、学校現場での防災訓練や行政が取り組む防災教育について調査してきた。
舞子高校は全国で初めて「環境防災科」を設置した県立高校である。同科は学年1クラスで定員は各40名、卒業に必要な単位のうち「災害と人間」「自然環境と防災」などの専門科目が1/3を占める。
この5年間の震災メモリアル行事の内容は
(08年) 前年発生の地震被災地から、新潟県立柏崎総合高校と石川県立門前高校が参加
(09年) 中国・四川大地震で



兵庫県立舞子高校 1.17震災メモリアル行事

『阪神・淡路大震災を忘れない～21世紀を担う私たちの使命～』

(09年) 中国・四川大地震で

■ボランティアに優劣はない

第3部では、東北被災地で心のケアに携わる高橋哲氏（臨床心理士・兵庫県スクールカウンセラー・スーパバイザー）小笠原祐子氏（高田高校教諭）諏訪清二氏（舞子高校環境防災科長）による対談が行われた。

震災発生から繰り返し被災地ボランティア活動を行っている舞子高校。引率した諏訪先生によれば、活動後の生徒の受け止めには両面があるという。一つは被災者から素直に感謝を伝えられ、経験を将来に役立てたいという反応。もう一つは自分の微力さに直面し、一生懸命やっただけで果たして役立ったのかという反応。果てしなく続く瓦礫の山を前にして、「こうした「負の反応」を強く示す生徒は少ない」という。



これに対し高橋先生は「ボランティアの目的は2つある。役に立つことをすること、そしてつながること（そのきっかけをつくること）」と語った。瓦礫を片付けた、食事を用意したなどの形が見える活動も大切だが、活動を通じて現地の人たちとつながることは長期的に見て非常に重要なアクションだと言葉を重ねた。

諏訪先生からは、余震がある度にお見舞いメールを現地に送る舞子高校生の話が紹介された。その生徒はボランティア後も被災地としてつながっている。そして「ボランティアに優劣はない。ボランティアも募金もたまたま機会に恵まれたから。アクションを起こす起こさないの違いはあっても、つながりたい！との気持ちになることが大切」と語った。

高田高校の小笠原先生は「ボランティアを当たり前と思う高校生に感動する。兵庫の高校生には、それぞれの被災地の経験を地元に戻って伝えてほしい」と述べた。これに対し、「高校生が『伝える』場面には限りがある。例えばマスコミを

通じ子どもたちの頑張りを認める機会が増えるなどすれば、彼らの自己肯定感につながる」という意見が返された。



■兵庫の高校生から

第2部では兵庫県内6高校の代表から東日本大震災ボランティア活動について報告があった。各校の発表は高校生がどのように被災地とつながったかがよくわかる内容であった。

▼私立啓明学園高校

宮城県でのボランティアに参加。津波被害のイチゴ農園の復旧作業を手伝う。「自分たちは微力かもしれないが、決して無力ではない」と力強い言葉。

▼県立高砂南高校

気仙沼と大島に20名で参加。8月の酷暑の中、瓦礫撤去を行うが達成感は小さかった。想像はごく僅かしか理解できない。止まっていたはできないこ

とを体中で感じ帰ってきた。

▼県立伊丹高校

市内4つの高校生徒会が集まり、伊丹クローバーチームを編成して東北で活動した。現地で見たこと感じたことを地域で発信したい。日本にいたら地震は避けられない。防災意識を強く持ちたい。

▼市立神港高校

宮城農業高校の復興祭に参加する。時間を共有することで高校生の頑張る姿を伝えることができた。全校生徒のカンパで被災地への旅費をまかかった。

▼市立神港学園高校(野球部)

阪神淡路大震災の年、被災者から励まされる中でセンバツ出場。それ以来、1・17追悼行事ボランティアを野球部の伝統として続けている。昨年、大船渡高校野球部を神戸に招いて合同練習をした。これからもつながっていききたい。

▼県立舞子高校

被災地で9回のボランティア活動。夏休みには個人で出かける生徒もいた。県内の他の高校に舞子高校のボランティア経験を伝え、事前学習に役立ててもらった。

舞子高校環境防災科は設立10年。震災を「語り継ぐ」ことを防災教育テーマの一つに着実な成果を上げてきた。しかし入学してくる生徒はすでに阪神・淡路大震災を経験していない世代となった。同校防災教育の課題は変化してはいるが、「語り継ぐ」＝「つなぐ」ことがベースであることに変わりはない。今回の震災メモリアル行事でも「つなぐ」という言葉がキーワードとなっていた。

伊丹市内の高校は合同チームでつながり東北へと向かった。ボランティア活動の知識を、舞子高校とつながり教わった。神港学園野球部の活動は17年前の先輩からつながっている。そして神戸の高校生と東北被災地の高校生は震災を通じてつながった。

被災地の高校生は東北を蘇らせたいと語る。そこに故郷への深い愛情を感じる。ボランティア参加の生徒は、少しは役立てたかなと、はにかんだ。自己肯定につながっている。

防災教育は避難訓練だけではない。生命を守る学びを通じて周りをつながり、そして自分を大切にする。そんな大きな視野で取り組みたい。

